

アフリカでの生活から

—— 現地における日本人社会の一面 ——

百 木 英 明

この報告は、一九七三年九月から一九七六年三月までの二年半に渡るアフリカ・ザイールでの生活から、現地における日本人の社会関係の一面の分析を試みたものである。

一、はじめに

二、海外の日本人学校

三、ザイール

四、海外における日本人社会

五、海外での現地人との接触

六、むすび

一 はじめに

「鎖国」を改めた明治以来の百年で、脱アジア的欧米化、工業化により急成長を遂げた我国の、その要因としての学校教育の果たした役割は大きなものであったが、今日、我国の六十年代の経済成長に伴ない、資源に貧しい日本の現状から、それを海外に求める各企業の海外への進出が増大する中で、海外で働らく「日本人子弟の教育」という重要な問題が派生している。そのため、この問題の解消・援助協力のために、現在五つの形態の日本

人学校が、親を中心とした各企業の努力により現地組織を結成し、外務省の援助により世界各地に設置、運営されている。

二 海外の日本人学校

I 全日制日本人学校

外務省の援助の下、昭和三十一年一月の「バンコク日本人小学校」を最初に、主に東南・西南アジア、中近東に多く設立され、今年度までに四十七校が運営され、更に、三校の増設が予定されている。

II 日本語補習授業校

その土地の公立学校やインターナショナルスクール等に籍を置き、その周辺地域の休校日を利用し、週一度か二度、日本語の補習のための授業が行なわれている形態である。昭和三十三年九月のワシントンを初めとして、欧米を中心に七十校が現在運営されている。

III 私設全日制日本人学校

ロンドンの立教小学校がそれである。現在ではアフリカやその他諸国の日本大使館員・駐在員の子弟による志願も多く、入学も難しいようである。

IV 企業立日本語補習学校

アラスカのシトカ日本語補習学校がそれである。

V 企業立全日制日本人学校

サウジアラビア・カフジ明星小学校とイラン・シラーズ明星小学校の現在二校であるが、この他に昨年三月までのザイル明星ムソシ小学校の三校を、明星学苑が現地企業との契約による依頼を受け、その任務を遂行している。

以上、海外における日本人学校の五つの形態を説明したが、東南アジアを初めとする開発途上国においては日本人学校が、欧米諸国では日本語補習授業校が、現地における教育内容の相異から、国内への帰国時の学習に支障を来たさない事を趣旨として設立されたのである。つまり、教育の機会均等の視点からではなく、国内並み教育水準を目標とするマイナスマの補助の要請からである。しかし、今日では徐々にではあるが、現地においての外国人学校との交流が始められたようである。

それでも、登下校の際の車のラッシュによるその地域への影響、国際結婚による家庭・通学校・日本語補習校のことばの使い分けからくる問題、国内での「入試」を中心とした教育体制下での不備な受け入れ体制等、国内と現地社会との間に多くの問題が山積みされている。海外子女教育振興財団や企業の可能な範囲内での協力から進展を見せてはいるが、国の根本的な施策の必要性が求められよう。更に、そこでの日本人社会の在り方も一考せられよう。

三 ザイール

赤道にまたがるアフリカ大陸の中央部に位置するアフリカ第三の大国で、日本の約六・五倍の二三四万平方キロメートルの面積、人口二千二百万人、一平方キロメートル当り九人という人口密度と、更に豊富な鉱物資源に恵まれた国である。気候は、全国的には熱帯性であるが、鉱山のあるシャバ州（カタンガ州）南部は、海拔一三〇〇メートルの高原地帯であり、年平均気温二十一度摂氏という温暖な気候である。

また、一年は乾期（五月～十月）、雨期（十一月～四月）

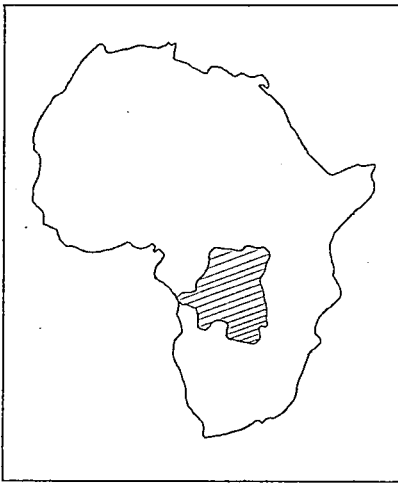


図 A

の二期に分かれ、五・六月には暖房器も必要となる。言語は、フランス語を公用語とし、その他リンガラ語、スワヒリ語等が話され、更に、各部族の言語が数百以上話されているといわれる。

一九五六年のベルギーからの独立承認を得て後の一九六〇年の独立後、三年間にわたるコンゴ動乱の原因となった鉱物資源豊富なこのカタンガ州南部とザンビアにまたがるカッパーベルトに着目し、日本の中核的産銅企業のN鉱業により、

- 1956年……ベルギーによる独立承認。
- 1960年……旧ベルギー領コンゴ独立。
コンゴ共和国となる。
- 1961年……N鉱業ヨハネスブルグに事務所開設。
- 1960～63年…カタンガ州の独立を目指す
カタンガ動乱。
- 1965年……現大統領モブツ將軍の政權
把握。単一政党(M・P・R)
を結成し、強力な政治体制
を確立。
- 1969年……鉱業協定承認。現地法人設
立。建設開始。
- 1971年……ザイール共和国と国名変更
明星ムソシ小学校開校。
- 1972年……ムソシ鉱山「開山式」「竣
工式」挙行される。
銅精鉱発荷貨車ムソシ発。
- 1973年……ザイール化運動。
- 1976年……明星ムソシ小学校閉校。

資料 I

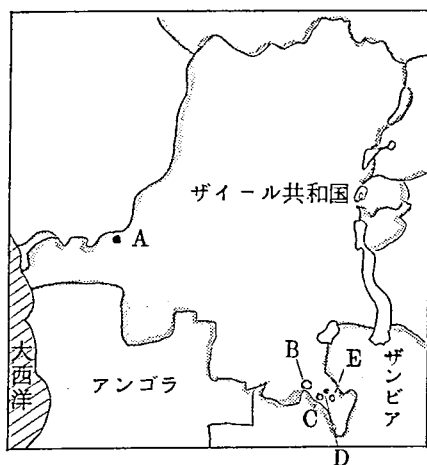


図 B

- A…キンシャサ(ザイール共和国首都)
- B…ルブンバシ(ザイール第二の都市。
鉱山からおおよそ100
Km程離れた所。買物
ゴルフ等はこちらです)
- C…ムソシ(鉱山のあるところ。カ
スンバレサからは約15Km)
- D…カスンバレサ(幹部社員住宅・ムソシ
小学校・供給所・テニ
スコート等がある。)
- E…キンセンダ(高品位な銅鉱石が産
出される。)

総合予備調査が実施された。

以下今日までの概略的な経緯を記すと、資料①のようになる。

このような背景の中で、ムソシ鉱山の近くに、病院・会館・ショッピングセンター・現地人小学校・一般社員住宅・日本人単身赴任者用住宅・ゲストハウス、その他の福利施設が建設された。

更に、ムソシ鉱山とキンセンダ鉱山との中間の五〇万平方キロメートルのカスンバレサ地区に、幹部社員住宅四十五戸（内管理職用住宅六戸）と、日常必要物資を供えた供給所、各種教室からなる明星ムソシ小学校とが建設され、日本人とベルギー人、家事労働のザイル人よりなる社会が形成され、日常生活が営まれている。又、ザイル人等を招待して催される一大行事の盆踊りもこの地区で行なわれる。

四 海外における日本人社会

海外における日本人旅行者の失態、深夜に渡たる日本人駐在員の勤勉さ等から驚きの眼で見られる日本人。また、「最もうちとけにくい日本人」と見られている日本人が、一外国に築いた「日本人社会」の中に、どのような社会関係が成り立っているかについて、その特徴によって分類してみると、次の六つの型に分かたれる。

- (一) 職制を中心とした人間関係
- (二) 出身地域別による人間関係
- (三) 出国時からの同行者間の人間関係
- (四) 趣味・娯楽による人間関係
- (五) 乳幼児を話題にする人間関係
- (六) 組一班における人間関係

まず、我々が現地に赴任すると、出入国業務を担当する社員や、その赴任者の所属する職場の人や、極めて親

しい人から出迎えを受ける。赴任者は翌日から鉱業所の概略説明や案内を受け、各々の職場へ配属される。又、妻は、自らの所属する班の人々への挨拶により、現地の社会に組み入ることになる。赴任者家族についての細かい準備には、主に職制を中心とした人々がその任に当たり、着任後の二・三日を親しい人や同じ職制の人々と夕食を共にする。こうして、現地での生活が始まり、新たな人間関係を築いたり、集団へ参加していくようになる。

(一) 職制を中心とした人間関係

中でも、自らの仕事に関連する職制による社会関係の特色として、技術系労働者と事務系労働者におけるその差異をあげることができる。

この現地においては、事務系は三部、技術系は四部から構成されている。事務系三部（総務・財務・業務）の日本人従業員の大半が、フランスやベルギーで、公用語としてのフランス語研修を終え、ザイル人との仕事の円滑を計りながら業務を遂行する役割を与えられたエリートの存在として派遣された社員から編成されており、国内各事業所の転勤経験者や、本社から直接現地へ出向してきた従業員である。それに対して、技術系四部（施設・採鉱・選鉱・探査）の日本人従業員は、管理職や幹部社員を除いては、大半が、一地域で長く生活してきた人々である。彼らは、国内での立場と異なり、現地においては、ザイル人を指導教育する立場にあり、スワヒリ語を駆使しながら基礎的事項の徹底指導をし、生産性の向上に努めている。この二系統からなる職制の協力により、国内で不足する銅の安定供給源を確保するために、日常の業務は遂行されている。しかし、業務への従事以外の交際は、この両者には顕著には見られず、私的交際としてのゴルフ競技においても、事務系・技術系と分かれて行ない、一緒に競技するのは月一回の全日本人を対象とした競技時においてのみである。但し、これも商社主催の競技においてである。また、マージャンや酒宴等で余暇を過ごす時にも、その交流はあまり見られない。日本人社員から構成された日本人会主催の各種競技も、職制対抗によるもので終っている。更に、私的交際のない場合においての特別な依頼（個人的色彩の強い場合）には、原則を貫きその依頼を拒否する。反面、僅かでも

私的交際があれば、その依頼を受理し、処理するのである。つまり、企業内においては、私的交際が都合の良い、一面で必要悪としての側面をもつといえる。

(二) 出身地域別による人間関係

職場を中心とした人間関係が、どちらかというと上下の強い性格に対し、同一地域で生活も仕事も共にしてきた人間関係は、水平で円卓の関係にある性格と言える。このことは、国内各事業所から派遣されてきた人々が、同郷としての横のつながりを持ち、同じ仲間が故郷のことばを話し、住んでいた土地と人々を思い出しながら繰広げられる酒宴に、特に、その特色を見い出すことができる。中でも、北海道出身者による組織は、現地に派遣される直前まで同一事業所で働いていた者に限定された厳しい約束事を保持し、例え、以前転勤により一時居留した者でも、その組織に参加不可能な確固たる性格を保持している。それに対して、国内各地域から寄せ集められて形成された歴史の新しい事業所出身者による会合は、ほとんどみられなかった。また、九州出身者による会は、入会に関する制限はなく、九州出身者でなくても入会可能であり、送別ゴルフや旅行等でそのまとまりを強めてる。時として、職制主催と同郷者主催によるゴルフ競技が同一日となった場合、彼らは後者のそれを選択した。一応、表面的には、地域出身者によるグループの対立はないが、彼らの意識の中には、他地域出身者を寄せつけない一面も伺える。それには、地方語のもつ土地に根ざした感覚と閉鎖性といえるものが考えられよう。

(三) 出国時からの同行者間の人間関係

ここでの関係は、出国のための準備や説明を通じて、各々の間に不十分ではあるが情報交換が既になされている関係を、未知の国への不安な状態を相互に依存し合うことにより、各々相互の関係を強くし、不安を除去して現地の社会にとけこむのである。その際、既に居住している人々との間には、一定の距離が置かれている故に、同年入社・同期生としての性格が強く働き、その後も懇親会等を重ねるのである。更に、このグループが次の趣味の関係へと拡大し、特に主婦に見られるが、フランス語の勉強会、お菓子作りの会へと継続されていくことに

なり、現地の社会を出る時まで持続する。

(四) 趣味・娯楽による人間関係

前者とも関係のあるものであるが、娯楽に乏しい海外での生活から、互いの関心事により形成される関係である。フランス語勉強会、マーじゃん愛好者同士、テニスやラグビー等のスポーツ愛好者による関係などがあげられる。これは、拘束力のない、自由な関係であると言える。

(五) 乳幼児を話題にする人間関係

湿度の低い快適な気候条件の下での育児故に問題はないが、それでも、マラリア・チフスの発生等から乳幼児を守るため、主に母親の間での情報交換を通し、家族間相互の関係へ発展していく人間関係である。同時にこれは、子供の社会圏としての性格づけをしている。

(六) 組一班における人間関係

一つの日本人社会での生活を営む上での公的な連絡網としての関係である。最低六戸を単位とする班を作り、会社からの連絡事項や、テレビ・映画上映の連絡、一斉清掃、買物の連絡を主目的とする班である。また、各班より一名選出からなる自治的存在としての主婦の会を運営し、帰国時の餞別、スポーツ施設の管理、雑誌の回覧などの雑務を分担し運営している。更に、二班から組を構成し、この組を週二回（火曜日・金曜日の午後）に開かれる野菜・肉の買物の順番に利用している。

しかし、隣同士の交際はそれほど密な関係でもない。これには、社宅内における交際の注意を会得したことによるものであろうか。

すなわち、

一、移転した際、最初に近寄ってきた人には注意すること。（近よって来た人は、この社宅の中で親しい人を持ってないか、さもなくば相手にされなかったと考えられるため）

一、同じ階段を使用する人と親しくならぬこと。親しい人は別棟の人にすること。（事があっても気まずい思いをしなくて済むため）

などのことを、一主婦から聞いたことから伺える。このように、嘗ての社宅での生活経験を生かして、海外においても、国内と同様の社会関係を持つとうとする意識が、日本での生活からひき継がれ維持されていることを理解することができる。

また、「神ごとの多い国内」とは反対に、殉職者に対する年一度の合同慰霊祭以外には神事・仏事はほとんどなく、一部の高令社員以外仏壇を飾ることもなく、国内での神への縋りを日本人の社会に、それも気の安まる様な社会に求めているように考えられる。

五 海外での現地人との接触

鉱物資源を求めて進出した企業により、現地人が彼らの自給自足の生活の場から、貨幣による生活への変更に伴なって受けた影響は多大であったと考えられる。一例として、伝票使用による事務的処理の方法の問題である。伝票使用に対する制限の緩い時点で、彼らは自由に物品の払い出しを受けていたが、予算内での業務遂行と、伝票の金としての性格を説明することで、その乱用を食い止めたと聞く。また、減算の習慣のない彼らに、ソロバンを用いての計算指導や、事故防止のための保安教育が苦勞の多いものでも、一つ一つの基礎を徹底し、可能な範囲内での責任を彼らに与えて業務の移行を押し進めている。更に、病院を始めとする福利厚生施設の充実と保健衛生の向上等、地域社会を対象としたサービスが行なわれている。現在では、政府の指示による従業員のためのトウモロコシ栽培、野菜・養豚による食料供給も行なわれている。

しかし、日本人と彼らとの交際は、公の行事以外を除いてはほとんどないようである。

経済的独立を目指し、一九七三年十一月三十日に出された「ザイール化」「真正性の追求」等の政策により、

日本人とベルギー人家族が住む四十五戸の幹部社員住宅へのザイル人幹部社員の入居に対し、日本人内かなりの反対があった。その後、社宅増築後の七四年十二月から数人の幹部社員とその家族が移転してきたが、彼らとの交際はほとんどなかった。但し、帰国時の物の売買による交流以外においてである。それでも、結婚式に招待された日本人や、柔道の模範試合を通じての日本文化の普及に努めた人々もいた。

六　　むすび

このように、日本人とザイルとの交流には今一步の感じがするが、子供達は大人と関係なく、スワヒリ語を駆使し、遊びを通して彼らとの交流を深めている。帰国時にも彼らの家へ招待され、サインの交換をし、彼らなりの交流を深めたようである。子供の行動範囲は驚ろく程広く、日本人社会の情報収集者として、その社会の日々の移り変わりを把えていく。しかし、その子供の社会も親の社会関係の投影されたものとなっており、子供同士の話も、親の出来事やゴルフ・マージャン等の成績がその話題になることも多く、実際のあった子供同士が親と同様に昨日の事柄を話の主題にすることも多々ある。また、入学以前において、親同士の交際がない場合、僅か四十五戸内の同年令の子供同士でも遊び仲間としては成り立ち得ず、親の心配事であり、親相互の社会関係が子供に影響を及ぼしている。

そこで、これら幼児に関する併害を解消するために、数名の母親が保育クラブを設け、小学校の一室を使用し、その運営に努力していた。しかし、この問題も小学校入学によって改善される。

学校の機能としても、この社会における集会所の性格を持ち、各種説明会、映画・テレビ上映、運動会、フランス語勉強会、親・子参加の催しなど、文化的側面への援助の役割も果たしている。つまり、現地での教育課程の相異によるマイナスイ面の日本語学習の補助を目的として海外に設立された日本人学校が二十年以上経った今日、国民の教育の機会均等を、一企業に依存する消極的姿勢から、国の責任の下に、徐々に改善されつつあるがその

充実を計り、また、自らを閉ざした形で日本人学校の開かれた学校への進展と、日本語を含めた日本文化への関心の増大する中で、誤解を避ける意味からも、日本の生地に近い文化の海外へのPR活動としての日本文化館へと資的拡大をし、同時に、その地に根ざし育てられてきた他文化を直接膚に触れながら学びとる相互の交換関係へと発展すれば、そこで学ぶ子供達の体験を裏り多いものとすることができるのではないだろうか。更に、日本人社会の非孤立化の一役を果たしはしないだろうか。

紙数の関係から表面的に海外における日本人社会の一面を扱ってきたが、まだまだ問題も多いようである。今後、日本人社員の海外進出が増大しようが、その子弟も含めて日本人が、一元的性格の日本人社会が国際化社会へどう対処するかが我々に課せられた問題であると同時に、私の今後の課題とするところである。